

英国小説史再考 : 1688年から1727年まで

武田, 将明 / TAKEDA, Masaaki

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費補助金研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

2009-06-08

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 8 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2008

課題番号：19720068

研究課題名 (和文) 英国小説史再考——1688年から1727年まで

研究課題名 (英文) Towards a New History of the British Novel: from 1688 to 1727.

研究代表者

武田 将明 (TAKEDA MASAAKI)

法政大学・文学部・講師

研究者番号：10434177

研究成果の概要：英国 18 世紀小説の特徴を再考するために、Daniel Defoe や Eliza Haywood の作品について研究し、口頭発表と論文で成果を公表した。特に、従来は内在的に発展したとされてきた英国 18 世紀小説のリアリズムが、実は 17 世紀フランス文学との影響関係のなかで育まれたことを示した。また、文学史に関する考察や、現代日本文学と英国 18 世紀小説の関係を考察する論考も発表した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,700,000	0	1,700,000
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,200,000	450,000	3,650,000

研究分野：人文社会系

科研費の分科・細目：人文学、文学、英米・英語圏文学

キーワード：英国小説、18 世紀、女性作家、文学史、英仏関係

1. 研究開始当初の背景

2004 年から 2 年間に渡り、私は日本学術振興会特別研究員 (SPD) として、「英仏関係から見た十八世紀英文学」というテーマで研究を進めた。そのとき気づかされたのが、既存の 18 世紀英国小説史のほとんどが、英国小説が内在的に発展したことを疑っていないことであった。この分野の古典的業績である Ian Watt の *The Rise of the Novel* (1957) から、批評理論を積極的に援用した Lennard J. Davis の *Factual Fictions* (1983) まで、この固定観念に縛られている。

しかしながら、実際の出版状況を検討する

と、18 世紀の英国小説が内在的に発展したという説が虚構だと分かる。Michael Cox 編 *The Oxford Chronology of English Literature* (2002) によれば、18 世紀前半に、同時代のフランス小説、例えば Marivaux (1688-1763)、Le Sage (1668-1747)、Prévost d' Exile (1697-1763) の作品の翻訳は多数出版されており、小説家にもフランス文学の影響を受けた者が少なくない。例えば、*Tom Jones* (1749) の作者 Fielding (1707-54) は、1732 年に Molière (1622-73) の *Le Médecin malgré lui* (1666) の英訳を出版しているし、同じく 18 世紀英国を代表する小説家 Tobias

Smollett (1721-71) は *Le Sage* の悪漢小説を翻訳し、自作でも深い影響を受けている。

ただし、この時代の英文学と仏文学の影響関係は一方的なものではない。Marivaux は Addison (1672-1719) と Steele (1672-1729) の編纂した日刊紙 *The Spectator* (1711-12, 14) に倣って *Le Spectateur français* (1721-24) を刊行した。Prévost d' Exile もまた *Le Pour et contre* (1733-34) という定期刊行物を通じて英国文学を紹介したのみならず、Richardson (1689-1761) の小説を翻訳し、フランスに熱狂的な Richardson のファンを生んだ。例えば Diderot (1713-84) は、Richardson と Sterne (1713-68) の愛読者として有名であり、他にも、Voltaire (1694-1778)、Rousseau (1712-78) など、思想や創作で英国文学の影響を受けたフランス人文学者の例はいくらでも挙げられる。

2. 研究の目的

上記の事情を踏まえ、本研究は、18 世紀英国小説の成立史を同時代のフランス文学の影響も考慮しつつ再構成することを目標に据えた。ただし、今回の研究は、英仏のどちらが最初に近代小説を確立させたかを問うものではない。その問いが両国における国民文学の確固たる存在を前提としているのに対し、むしろ本研究は、18 世紀、正確には名誉革命 (1688) 以降、政治経済の面では近代世界の覇権を競った英仏両国のあいだで、生産的な文化交流が行われていたことに注目する。18 世紀小説の出版状況は、国家の枠に必ずしも縛られない情報流通と文化交流の拡大を示唆している。Watt から Davis までの小説史研究が前提としてきたような国民文化のあり方に懐疑的な態度を示す新たな研究が求められているという考えのもと、18 世紀英国小説史の根本的な書き換えを試みた。さらにここから、現代の小説分析にも活用できる小説論を構築する手がかりを得ることも目標とした。

3. 研究の方法

(1) 今まであまり取り扱われなかった 18 世紀英国におけるフランス小説の翻訳を実際に原典と突き合わせて読むことで、17 世紀フランスのリアリズムと 18 世紀イギリスのそれとの差異を検証した。

(2) 小説史を構成するときに陥りがちな一国中心主義や過度の歴史主義を警戒するため、Ian Watt, *The Rise of the Novel* や夏目漱石『文学評論』の文学史的記述のもつ問題点を考察した。

(3) 18 世紀英国小説を読むことの同時代的

な意義を示すために、現代日本の小説との関係性を探究した。

4. 研究成果

(1) 2008 年度に口頭で発表し、2009 年度中に刊行予定である『18 世紀イギリス文学研究 4』(開拓社) に収録される Eliza Haywood の翻訳に関する研究(「Eliza Haywood の翻訳——模倣と創造」)では、17 世紀フランス小説のリアリズムのもつ reflective (内省的) な特徴に対し、18 世紀イギリス小説のリアリズムの affective (情動的) な特徴を示すことで、従来の研究とは異なるリアリズム論を提唱した。ジョン・ロックの認識論のなかでも感覚の誤りやすさに関する経験論的な指摘が、18 世紀英国の作家たちの散文様式に少なからぬ影響を与えている。一読して関連を見出したい Haywood と Defoe の文章における幻想的な記述の類縁性をここから説明できる上に、18 世紀後半に確立されたゴシック・ロマンスのもつ幻想性もまた、実は同じ系譜に属するものであると示唆することで、従来は結び付けられていなかった 18 世紀イギリス散文文学の複数の分野を系譜学的に関係づける道筋をつけた。

(2) 2007 年度に口頭で発表し、『英語青年』2008 年 9 月号に収録された論考「仮構される内発性と近代文学——漱石の十八世紀英国文学論を読み返す」では、Watt から Davis までの 18 世紀小説史研究に見られる内発性重視の傾向に対し、夏目漱石(金之助)による英国 18 世紀文学史『文学評論』(1909)には英国の近代文化を批判的に眺める視点が見られること、その意味で漱石と(アイルランド人として英国を外から観察した) James Joyce の文学論に共通点があることを指摘した。しかし、『文学評論』もまた英国文学を英国の問題として捉えてしまう点において限界があり、今後の文学史研究は英国 18 世紀小説というものが実体として存在することを前提とするよりも、時代と地域に還元されない小説の変遷と普遍性を捉えるべきであることを訴えた。さらに、この問題は英文学だけのものではなく、同じことは日本の近代文学史にも当てはまることも指摘した。

(3) 『群像』2008 年 6 月号掲載の「囲われない批評——東浩紀と中原昌也」、および同誌 2009 年 4 月号掲載の「タナトスからの脱出(エクソダス)——現代小説における死と倫理」では、どちらも主たる論の対象を現代日本の作家・批評家に絞りながらも、批評のあるべき姿、および現代小説が今日の姿をとるに至った理由を提示するために英国文学の事例をしばしば取り上げた。前者では今日の日本における批評の停滞状況を(Rónán

McDonald, *The Death of the Critic* を参考に) イギリスの現状と結び付け、現代文学の共通問題として批評あるいは創作における批評意識の再生の必要性を主張した。後者では Defoe, *Robinson Crusoe* のもつ近代小説的な主人公の行動様式を明確に示すことで、「タナトス型」と私の名づけた現代小説の 1 タイプを説明するのに役立てた。私の仮説によれば、*Robinson Crusoe* 的な近代小説においては、公的な諸規則と個人が自らに課す諸規則との間の様々な葛藤が小説世界に奥行きを生み、近代的なキャラクターを確立したのに対し、現代小説においては、公的・私的な諸規則がともに明確に示されないが故に、かえって葛藤が形式化したため、小説の主体はしばしば自らを根拠なく責め苛むことになる。なお、前者によって、第 51 回群像新人賞(評論部門)を受賞した。また、こうした批評活動のなかで、Daniel Defoe, Percy Bysshe Shelley, Eliza Haywood などの英国作家を、東浩紀、中原昌也、桐野夏生、金原ひとみ、平野啓一郎、舞城王太郎、さらには携帯小説などと並列して論じることで、英文学研究と現代日本文学の批評とのあいだに今まで以上の交流をつくることを目指した。英文学研究の側からは、2009 年度日本英文学会でのシンポジウム(第 1 部門)「コモン・リーダーは復権できるか——文芸批評と作品論」が、私の批評活動への一つのレスポンスという意味も含んだ企画として行われた。日本文学の側からも、作家から実際に反応が寄せされはじめており、今後も現代文学の発展に寄与していきたいと考えている。

(4) 今回の研究で得られた視点を基に、現代英国文学についても様々な考察を行った。「新しいブーツとすり切れた批評——現代イギリス小説における資本と倫理」では、2007 年度ブッカー賞を題材に、現代英国小説が直面しているメディア全体の経済問題を指摘し、これと小説という分野そのものの停滞状況を重ね合わせ、こうした現状を変える可能性として、作家 Ian McEwan の取り組みに注目した。McEwan に関しては、「出口のない世界——イアン・マキューアンの時間感覚」、訳書『贖罪』(原題 *Atonement*) の解説でも詳しく扱った。さらに、「新しいブーツとすり切れた批評」の続編として、「海外文学最前線(イギリスおよび英語圏)——前線消滅後の光景」も執筆し、こちらでは 2008 年度ブッカー賞の結果を批判的に吟味しつつ、20 世紀末から 21 世紀はじめにかけての英国小説の傾向を、McEwan 的な構築性と Salman Rushdie 的な雑種性、および Janette Winterson や Ali Smith のような性の異化、さらに Alasdair Gray のような私的宇宙の幻想性に分けて紹介した。

(5) 「シミュラクルと変容の詩学——シェリー『生の勝利』を読む」では、ロマン派の詩人シェリーの創作のなかに、ポール・ド・マン的な言説の避けがたい誤謬性に関する認識を乗り越える方法論を読みこみ、英米および日本の現代批評の陥っている自己言及の悪循環とそれゆえの衰退を乗り越える可能性を過去の英国文学に求めた。

(6) 書評を通じて、英米、日本の文学作品と批評文献の紹介にも努めた。具体的には、仙葉豊、能口盾彦、干井洋一編『未分化の母体——十八世紀英文学論集』(英宝社)、桐野夏生『東京島』(新潮社)、リチャード・パワー『われらが歌う時』(新潮社)、J. M. クツェー『鉄の時代』(河出書房新社)、ポール・オースター『幻影の書』(新潮社)、アラヴィンド・アディガ『グローバリズム出づる処の殺人者より』(文藝春秋)をこの 2 年間で扱った。

(7) 18 世紀文学およびその研究に関連した翻訳を行い、S・カルブ(編)、『十八世紀研究者の仕事——知的自伝』は 2008 年に翻訳が刊行された。これは 18 世紀フランス文学研究者たちが研究生活を振り返った自伝的文章・インタビューを収めた著作であり、私は全 13 篇中 2 篇を訳出した(原文英語)。また、2009 年末に筑摩書房(文庫)から刊行予定のサミュエル・ジョンソン『詩人伝』(小林章夫監訳)では、最も長い章の一つ「ドライデン伝」を担当している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

- ① 武田将明, "Divided Hearts, United States': Daniel Defoe, James Hodges, and the Debate on the Anglo-Scottish Union." *Poetica* 68 号, 1-15 頁, 2007 年, 査読有
- ② 武田将明, 「新しいブーツとすり切れた批評——現代イギリス小説における資本と倫理」、『ユリイカ』, 3 月号, 53-59 頁, 2007 年, 査読無
- ③ 武田将明, 「書評『未分化の母体——十八世紀英文学論集』」、『英文学研究』, 85 号, 145-49 頁, 2008 年, 査読有

- ④ 武田将明、「囲われない批評——東浩紀と中原昌也」、『群像』、6月号、88-110頁、2008年、査読有
- ⑤ 武田将明、「仮構される内発性と近代文学——漱石の十八世紀英国文学論を読み返す」、『英語青年』、9月号、3-10頁、2008年、査読無
- ⑥ 武田将明、「出口のない世界——イアン・マキューアンの時間感覚」、『英語青年』、11月号、14-16頁、2008年、査読無
- ⑦ 武田将明、「タナトスからの脱出（エクソダス）——現代小説の死と倫理」、『群像』、4月号、180-221頁、2009年、査読有
- ⑧ 武田将明、「海外文学最前線（イギリスおよび英語圏）——前線消滅後の光景」、『群像』、5月号、350-59頁、2009年、査読無
- ⑨ 武田将明、「シミュラクルと変容の詩学——シュリー『生の勝利』を読む」、『表象』、3号、55-63頁、2009年、査読有
- ⑩ 武田将明、「Eliza Haywoodの翻訳——模倣と創造」、『十八世紀イギリス文学研究』、4号、頁未定、2010年、査読有（未刊行、2010年5月刊行予定）

〔学会発表〕（計5件）

- ①「武田将明、「仮構される内発性と国民文学——漱石の18世紀小説論を読み返す」、表象文化論学会第二回大会、2007年7月1日、東京大学駒場キャンパス
- ② 武田将明、服部典之、原田範行、「合評会『未分化の母体——十八世紀英文学論集』をめぐって」、18世紀イギリス文学・文化研究会、2008年5月10日、専修大学神田校舎
- ③ 武田将明、原田範行、「『ガリヴァー旅行記』を徹底的に読む」、日本英文学会関東支部第3回大会、2008年9月20日、早稲田大学外山キャンパス
- ④ 武田将明、「Eliza Haywoodの翻訳——模倣と創造」、関西十八世紀英文学研究会、2008年12月13日、同志社大学今出川キャンパス

- ⑤ 武田将明、齋藤衛、清水徹郎、岩田美喜、「コモン・リーダーは復権できるか——文芸批評と作品論」、日本英文学会第81回大会、2009年5月30日、東京大学駒場キャンパス

〔図書〕（計2件）

- ①「武田将明、「文庫版解説（イアン・マキューアン著・小山太一訳『贖罪』）」、新潮社、総頁数643頁中11頁執筆、2008年
- ② 武田将明、秋山伸子、井上櫻子、長島律子、中山智子（訳）、中川久定、増田真（監訳）、S・カルプ（編）、『十八世紀研究者の仕事——知的自伝』、法政大学出版局、総頁数389頁中62頁翻訳担当、2008年

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

「武田将明氏、群像新人文学賞（評論部門）受賞記念インタビュー」

<http://repre.org/repre/vol6/topics02/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

武田 将明 (TAKEDA MASAOKI)
法政大学・文学部・講師
研究者番号：10434177